

第三百四十八回 青葉会

平成二十七年三月二十六日(木) 午後五時半〜八時半 丸紅来客食堂(談話室)

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生(御自宅でリハビリ中)

今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤保明

小西弘子 豊田ゆたか 福島正明 星田啓子 山崎亜也 山内天牛

伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄 渡邊盛雄

赤田堅 安部眞希子 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 村田くに子

山崎青史 山本三恵

《互選句》

十点 ☆ 淡雪の混じる火の粉や二月堂 堂哉 (万・猛・恭・忠・孤・保・弘・敏・ゆ・亜)

八点 ☆ 般若湯西行しのぶ花の夜 盛雄 (万・堅・猛・孤・五・千・敏・啓)

(☆:上五・下五を共に五音の名詞にせぬ様に↓「西行を偲ぶ花の夜般若湯」)

七点 ☆ 芽柳に草書のやうな小糠雨 孤舟 (万・猛・恭・龍・敏・允・正)

(☆:助詞「に」は指定の意が強く働き過ぎるので、芽柳・草書・小糠雨などの柔らかい語感と合わない。↓「芽柳へ」)

六点 ☆ 見物の遍路二人やオーブン戦 堂哉 (万・忠・千・敏・隆・青)

(☆↓見物のお遍路二人 | | |)

落ちさうなシエフの帽子やミモザ咲く 正明 (孤・弘・ゆ・允・啓・天)

☆ 朝に二分夕べに三分の花便り 啓子 (万・眞・孤・五・千・隆)

☆ 振袖の談笑運ぶ春の風 猛 (万・堅・恭・孤・く)

☆ 春満月もう一駅を歩こうか 孤舟 (万・千・ゆ・允・亜)

☆ 黄砂を来て一番風呂を使ひけり 全 (万・弘・亜・青・天)

(☆↓霾(はい)を来て一番風呂に浸かりけり)

四点 ☆ 暮れ泥(なず)む春の空ある留守居かな 恭延 (万・弘・龍・啓)

☆ 忘れ雪あの日被災の人に地に 忠彦 (万・弘・正・青)

(☆:天地人の順位に従うほうがリズムが良いかと思う。↓「地に人に」)

薬(ひこばえ)や甥は農業継ぐ気なく 全 (く・亜・青・三)

☆ 如月や爪の伸びまで早まれり 保明 (万・眞・啓・天)

(☆:「つ」音の韻を踏んでリズムカルに。↓「二月早や爪の伸びまで早まりつ」)

☆ ふくらみてまた身を縮め花蕾 ゆたか (万・恭・保・千)

(☆↓花の蕾ふくらみ縮み雨つづき)

☆ 山椒の若芽いでたり五目寿司 啓子 (万・五・龍・隆)

(☆↓中七「若芽を飾り」)

三点 ☆ 霊園の人並み絶えず花の雲 そらお (万・隆・く)

☆ 植木屋の庭を巡りて梅見かな 全 (万・堅・保)

☆ 嘶家の名人揃ふ彼岸かな(米朝) 紀久男 (万・堅・忠)

お彼岸に宿替えしたる米朝はん 猛 (堅・五・隆)

芸風も句風も春風思はせし(悼む米朝師匠) 恵洲 (紀・猛・孤)

☆ 湯気立つ茶供へらる墓初桜 弘子 (万・眞・青)

(☆↓初桜墓へ湯気立つ茶を供へ) (青:中七「供えらる」↓「供へらるる」)

戻ること無き生徒達遅桜 正明 (紀・龍・敏)

☆ 夕桜ゆるり酔ひ待つひとり酒 規雄 (万・啓・く)

短き旬味はふ鍋の鱸かな 亜也 (紀・忠・ゆ)

明日居てね生きた白魚(しらうを)送ります 天牛 (眞・恭・亜)

戦艦武蔵海底に七十年

盛雄 (紀・五・く)

深海に無明の日々や飛花落花 紀久男 (ゆ・正)

句碑多き須磨の首塚春吹雪(敦盛塚) 猛 (允・啓)

春告げるシロエビ躍る富山湾

☆ 末つ子に良き縁あれと雛納
 落第の夢見る季節サスペンス
 蒼穹の五線譜飾る揚雲雀
 (☆:雲雀は視覚よりも聴覚の詩にしたいので↓「蒼穹に五線譜奏づ——」では如何)
 大正の雛はお顔が蒼ざめて
 ☆ 春風が診察待ちを紛らはせ
 (☆:「が」↓「や」)
 保明 (忠・正)
 全 (万・三)

白足袋が雅に歩む春の宵
 春場所や行司衣装の艶やかさ
 資源ゴミの文芸春秋春寒し
 弘子 (正・青)
 全 (啓・天)
 全 (五・く)

(☆↓資源)みの「文芸春秋」——)
 この星の人なげ狂ひ花散らす
 残る鴨決断しえぬ吾に似たり
 健介 (敏・亜)
 全 (忠・三)
 恵洲 (万・眞)
 正明 (万・天)

☆ 春ゆゑかはた老いゆゑかこの眠さ
 ☆ ヒヤシンス色様々な巫女の鈴
 (☆↓巫女の鈴ヒヤシンスも色様々に)
 ☆ ふと不安数へ直せば足りぬ雛
 国技館へと吹き荒るる蒙古風
 紫雲英(げんげ) 摘む大和三山鼎座(ていざ) して
 毀(こぼ)てけり姿よき梅ありし家
 亜也 (紀・龍)
 全 (万・保)
 昇 (猛・千)
 全 (允・三)

(☆:「て」↓「ち」)
 盆梅を陳ねし座敷陽暉樓
 「道明寺」の仁左衛門
 全 (紀・弘)

一点
 ☆ 梅花祭昔公(かんこう) 役の神気かな
 悟り得ぬ遍路数度(すど)の友惚(ぼ)け気味に
 紀久男 (万)
 全 (三)
 春麗倭館(わかた)で焼きし高麗(こま)茶碗
 五郎太 (正)
 全 (眞)
 馬酔木(あせび) 咲く雨の中での池掃除
 全 (隆)
 春筍やどこの産かと尋ねあり
 弘子 (万)

☆ 新幹線の引き寄す父郷初桜
 (☆↓初桜父郷近寄す新幹線) (青:中七「引き寄す」↓「引き寄する」)
 花を下げ踏切開くを待つ彼岸
 全 (保)
 (☆:単に「花」とすると「桜」と混同し易ひので「供花を下げ——」)
 咲く花の蔭に寄り添い母と子と
 ゆたか (保)
 正明 (万)

☆ 初桜未舗装道の柔らかみ
 (☆:下五↓「柔らかく」)
 山菜黄(さんしゅゆ)の花芽や日ざしほしいま
 啓子 (允)
 全 (ゆ)
 明け染める富士背に負ふて公魚(わかさぎ)漁
 (☆↓明け初める富士を背に負ひ公魚漁)
 全 (隆)
 春休みへ静かな下校のランドセル
 規雄 (猛)
 酒含みゆるり酔ひ待つ春の宵
 亜也 (万)
 全 (紀)

☆ 練焼く腹の卵の粒を賞づ
 有明の海の手昔筵(ひび) 胞子(えを) 夢む
 天牛 (万)
 ☆ 初白蝶兒に近寄りてゆるり去る
 (☆↓初白蝶兒へ近寄りてゆるり去り)
 全 (恭)
 お彼岸や老舗菓子屋で待たさるる

● 次回青葉会

四月二十三日(木) 午後五時半から八時半 (丸紅 談話室)
 ▲ 当季雑詠五句 投句二句 ◎ 年会費集めます
 五月二十八日(木) 午後五時半から八時半 (丸紅 談話室) 以上文責 紀久男

一 今回は恭延さんから13名出席。投句7名。先づ弘子さんが萬緑新人賞獲得されたことを披露し拍手喝采。なお、弘子さんより受賞記念に鮎子釘煮と「八海山」純米吟醸の寄贈がありましたのを始め、啓子さんの「Kiss of Fire」加賀の純米吟醸（ノーベル賞授賞式祝宴に供された）、恭延さんの「八海山」、正明さんの「さつま小鶴」、孤舟さんの「鶴齡」（新潟）、忠彦さんの「雪の茅舎」秋田の純米吟醸、亜也さんの「大七・戒石銘」生酛・純米と左党好みの酒肴が揃い、当会らしい活況を呈しました。

先生から頂戴した選句・添削と一筆箋、龍平さんのESSAY、毎日新聞掲載の三津五郎の句等を回覧。猛さん司会役で御覧のように堂哉さん、盛雄さん、孤舟さんが好成績でした。

二 関係者近詠

青空に梅の蕾の白含（ふふ）み	万里子	初めての雪の眩しき赤子かな	規雄
枕から白髪（しらが）を拾ひ年新た	全	——「NHK俳句」4月号	西村和子選
文机へ飴を買ひ足し日脚伸ぶ	全	寒栢や街灯ひとつ切れてをり	陽亮
雪霏々と寡婦長かりし友逝きぬ	全	——「俳句」3月号	出口善子選
下枝から紅白梅の咲き上り	全	先生の快気と米寿を祝して	
節分や米寿の豆を枱一杯	全	快晴の山麓眩し花辛夷	芳博
小太りの番鳩へも追難豆	全	春泥に踏み出す一步無人駅	允章
六十路なほ叱られ通し初稽古	眞希子	天麩羅のみどり鮮やか露の臺	全
寒椿百三媼の密葬へ	全	球春や息子の球威掌の記憶	堂哉
雪富士や新幹線に旅の猫	全	生き生きと桃の節句の割烹着	全
寒日和募金へ給与の一割を	全	春の富士今朝麗しき姿見せ	千恵
冬菜背負ひ母亡き家の賄ひに	全	母乗せて桜のトンネル往復す	全
大年の築地刺し積む売伝票	弘子	身構えて再診の日の桜餅	盛雄
ポップコーン通路に白し初映画	全	見取めん今日を限りの梅林	健介
ふるふると水ふるふると紙を漉く	全	啓蟄や触診の医師の手のぬくみ	全
ギヤマンの隻眼ぎらり初閻魔	全	いくつかの作まなうらに畑鋤く	盛雄
祈らねば祈らねばとて初詣	青史	身の奥へ寒の戻りや玉子粥	全
外科病棟蠟梅の黄の禍々し	全	初物の芹に飲ん兵衛常温で	紀久男
ふたたびのいのちほつほつ春隣	全	検診了へ無罪放免初音かな	全
富士の雪賀す煙突の白煙	恭延	——「きさらぎ句会」3月	
庭に出す鉢植の花寒の晴	全		
寒ざらひ済ませいそ酒の座に	紀久男		

——「萬緑」—— 四月号

三 2月に91歳で他界された堀口星眠（秋桜子の後継者・毎日俳壇の選者）の「堀口星眠選集」（「椽（とち）」創刊30周年と卒寿を祝って2014年出版）を弟子の天牛さんからお借りしました。

小生好み19句を抄出してみました。

部屋に椅子一つあるのみほととぎす	鴉（ひよ）の讃歌寄生木のまず萌えたつを	打てばひびく芝居談義や夕河鹿	漆黒の蛙天国医書を閉ぢ	下戸なれどわれにうるかの秋来る	読み耽る南溟戦記終戦日	寅さんにこらへ切れざる初笑ひ	月の客山ぶだう酒を提げきたる	ざさ虫の茶漬けすずしき草の宿
狐銃音かへらざる友ばかりなり	徳之島・戦艦大和鎮魂碑	海へ供華歌ひ了せぬ蟬ばかり	元旦の往診この世去る人に	憑かれ飛ぶ黒き揚羽やシューマン忌	腥風のあと薫風の山河あり（「椽」創刊）	雲間より鸞（うさぎ）こぼれ来る涅槃寺	森また森郭公浄土ひろごりぬ	老鶯の長逗留の唄暮らし
								郭公の恋むすぶ朴咲きにけり